

西田幾多郎と和辻哲郎の文化論における「形」 とその現象学的意義

キェウ イーフエイ
邱 奕菲

CHIU, Yi-Fei

(立正大学大学院)

要 旨

本発表では、西田幾多郎と和辻哲郎の文化論における「無」や「空」の解明を目指し、特に「形ありながら形なきもの」を西田の無と和辻の空を橋渡しする概念として両者の共通点と相違点を考察する。周知のように、「形而上学的立場から見た東西古代の文化形態」(1934年)で西田は、日本文化を形ありながら形なきものと考え、それを「無の文化」あるいは「情の文化」と呼んでいる。他方で、『日本精神史研究』(1926年)で和辻は、永遠の理想としての「法」を文化の根源・目標と見なし、それが人間の自己の全人格によって把握されるものと説き、また『人格と人類性』(1938年)で和辻は、人格性とは一切の現実性の主体的な根源すなわち「空」であると述べている。

なお、論文「日本文化の問題」(1940年)において西田は、「文化原形」というゲーテの言葉を借りて、「原形と云つても、固定せる形態を云ふのではなく、無限に自己自身を形成するもの、形成作用的なるものを云ふのである」と説いている。他方、『人間の学としての倫理学』(1934年)において和辻は、風習すなわち人間生活の不断の転変を貫いて常住不変なるものを「かた」と呼んでいる。つまり、カントの超越論的哲学における先験的で純粋なカテゴリーとしての形式に対して、西田と和辻はむしろ歴史的に形成されてきた形式、いわば文化そのものの「形」や「かた」をアプリアリとする。

既存の研究で指摘されている通り、1910年代後半から西田は現象学における「ノエシス・ノエマ」などの言葉を借りて、経験の現在性を強調しながら「アプリアリのアプリアリ」つまり現象の背後にある、絶対無の場所としての「統一者」あるいは「一般者」を探求してきた。その中で発表者が注目したいのは、論文「場所」(1926年)の中で西田が論じる「形式と質料 […] 両者の分離と結合とが自由でなければならぬ」という、形式の客観性や先在性を否定しその自由性や無

限性を説く西田の考えである。類似した考えは和辻においても見られる。例えば、《仏教倫理思想史》(1925-1926 年)において和辻は、「色が一切の現象の現出する(er-scheinen)形式であるとの考えには、その形式が現象の本質であって、現象はその本質の自己限定として現われるとの考えが含まれていると見なくてはならぬ」と述べているとともに、フッサールにおける「領域」(Region)や仏教における「界」(dhātu) 概念を借りて形式の先在性を否定してもいる。では、こうした「形式」、「形」の無や空的性格は西田と和辻の文化論においていかにして可能であるのだろうか。本発表はこの問いを主題として展開する。